
Just my type

長尾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Just my type

【Nコード】

N2551BA

【作者名】

長尾

【あらすじ】

親の都合で通っていた愛染女子学園の高等部に通えなくなった愛莉。従兄弟の明良とその友達にして愛莉の彼氏でもあるタクミ君と同じ高校に入学することになる。

同じ学校に通ってみると明良とタクミ君の他人の評価を聞く機会もあり、知っているつもりだった二人の全然別な面を垣間見たりして自分の気持ちが変わらなくなってくる。

兄のように接していたはずの明良にドキドキしたり、タクミ君は自分にはもったくないと感じたり。

1 入学式当日（前書き）

最低でも週に一回は更新したいと思います。完結まで頑張ります。

1 入学式当日

「入学式の準備があるから一緒には行けないけど、明良あきらいが迎えに来るから」

タクミ君はそう言った。私は頷きながらも眉間に皺が寄るのを止められない。

「待ってるんだよ。一人で行くな」

反抗的な態度はバレバレだったようでタクミ君は私の肩に両手を乗せると確認するように覗き込んでくる。

「分かった」

私はぶいっつと横を向いた。真正面にいるタクミ君が私の肩を掴んでいるから動くのは首だけだった。タクミ君は苦笑して私の頬にキスをした。

「やつ」

頬に手を当てて睨むとタクミ君は上機嫌で笑った。私のことをぎゅっと抱きしめて耳元にまでキスをする。

「これから同じ学校に通えて嬉しい」

タクミ君は今日は朝からテンションが高い。笑顔の大売出しみたいに笑い続けている。せっかくの整った顔が台無しだ。普通にしていたら韓流スターにも負けない美貌なのにもつたいない。

「じゃあ、行ってくる」

手を振るタクミ君に手を振って見送った。深い深いため息が漏れる。私の気分は下降中。タクミ君と一緒にいけないからじゃない。高校の入学式に憧れだったセーラー服を着れなかったことが辛い。私は小学校から通っていた愛染女子学園の高等部に進学したかった。タクミ君と同じ学校に行くつもりなんてなかったんだもの。

タクミ君は私の従兄弟、明良の友達。両親が仕事で忙しいからよく駅二つ離れた明良の家に預けられていて、そこでタクミ君に会

った。夏休みとかには一月も明良の家にいたからタクミ君ともよく遊んだ。中学生になって付き合っただけだと告白されて、付き合ってる。ケンカはしない。タクミ君はなんでも言うことを聞いてくれるから。

でもこんな関係、間違っている気がする。違和感が常にある。それをタクミ君に一生懸命伝えようとするのに、タクミ君はちっとも真面目に取り合ってくれない。「また愛莉あいりが迷宮に入っちゃった」って笑う。笑って、ぎゅって抱き締めて私の胸に沸きあがる疑問をなかつたことにしようとする。私は真剣に悩んでいるのに。自分の気持ちがあやふやなのが辛いのに。

車庫から自転車を出しているとブレーキの音がして目の前に明良のぴかぴかの自転車が止まる。

「愛莉、おはよ」

「おはよ」

小さく答える。苦笑した明良は私を子ども扱いして頭を撫でた。同じ年なのに明良は兄の役に徹しようとする。私が泣いてばかりだったせいだ。明良が妙に大人びてしまったのは多分私のせい。

小さい頃はいつも明良の家に預けられていて幼稚園にも迎えに来てくれるのは明良ママで。私はそのことがとても悲しかった。自分だけいつもママが来てくれなかったことが、本当に悲しかった。見捨てられた子供なんだって眼前に突きつけられたような気分がよく泣いた。そして明良ママと明良を困らせた。夏休みの間、ママは電話は寄越すものの会には来なかった。たった二つ早く駅を降りて少しでも私の顔を見てから帰宅するという手間をママはいつも惜しんだ。寝る前になると泣く私のために明良ママと明良は根気良く付き合ってくれた。

ママが生活を支えるために必死だったことに私は気付かなかった。そうして愛染女子学園の目が飛び出るような学費を払ってもらいながら当然な顔をして私を愛していないパパとママを呪っていた。

だから罰が当たったんだと思う。パパは過労で倒れて会社を辞めた。私は中学まではなんとか続けられたけれど、高校は都立に通うしかなくなった。

パパとママが共働きで一生懸命家計を支えていた時、私は家の手伝いすらしないで家族の時間がないと捻くれていた。とんでもない親不孝者。それにパパの体調よりも愛染女子学園に通えないほうが悲しいなんて。人として失格だと思う。小さい頃からパパとママは遠い存在で、だからちっとも好きじゃない。お金はかけてもらったけれど、そのことには感謝するけれど正直なところ私にとって家族は明良ママと明良なんだ。

明良にはずっと家族でいて欲しい。だから私はタクミ君を利用したのかもしれない。明良を男としてみているわけないって誤魔化すためにタクミ君の手を取ってしまったように思う。

タクミ君のことは好きだけど、それは恋人としてなのか疑問に思う。話し合おうとしてもいつもタクミ君にかわされる。少しずつ距離を置こうと思っていた矢先に同じ高校に通うことになるなんてとてもついてない。

2 初登校

明良に促されて自転車に乗る。私たちが通う高校は中高一貫校で明良は中学から入学した。

「こつち」と顎で示される。私の家を経由するとはいえ、慣れた道を走る明良を黙々と追う。

中学生になって一緒にいる時間が確実に減った。お互い部活に入ったし、わざわざ明良の家に行かなくても大丈夫なくらい一人の留守番も平気になった。

だから、明良に会うのは本当に久し振り。しばらく見ないうちに背中がとても大きくなっている。明良と遊んでいた頃が遠い昔に感じる。

「あのさ……」

珍しく歯切れの悪い明良に首を傾げる。

「なによ」

つい強気で聞いてしまう。普段は内気で人の言動に一喜一憂する私も兄のように甘えてきた明良にはいつだって偉そうにしてしまう。どんな態度をとっても明良が私を嫌うはずないと信じているから。

「驚かないで欲しいんだ。多分、絶対驚くだろうけど」
信号で止まって並ぶと明良は勿体つけてそう言った。

「だから、何を？」

風で口元に髪の毛が舞った。苛々してそれを振り払ってついでに明良を一睨みする。ただでさえ行きたくもない高校の入学式で気分が悪いのに。

「タクミ、中学の頃から生徒会に入ってた、高校入学と同時に指名されてるから高校でも生徒会に入る予定なんだ。だから今日も手伝いに行ってるわけだし。それでさ、顔が売れてるっていうか、人気

者なんだよね」

「そうなんだ」

思い返せば私はタクミ君の学校生活のことをほとんど知らない。

私はタクミ君に聞かれるままにつまらないことでもべらべら話すけれど、タクミ君は聞く専門で自分のことをあまり話さない。

「愛莉はずっと女子校だったから想像しにくいと思うけど、ファンクラブっていうか、そういうのもある。最初は戸惑うかもしれないけど、心配するな。タクミは愛莉のことしか見えてないからさ」

明良はそういうと笑って私の頭を撫でた。でも元氣になんかならないよ。憂鬱だ。中学からの進学組みはすでに知り合い同士だろうし、疎外感がありそう。今更ながら心配する点がずれていたことに気付く。私はこの学校でお友達を作ってそれなりにスムーズに学校生活を送れるのだろうか。やっぱり女友達がいなくて不安だし寂しい。明良やタクミ君の存在は確かに心強いけれど、体育や移動の時に一緒に行ってくれる友達が欲しい。

「ねえ、私みたいに高校から入学する人って何人くらいだろう？」
明良は首を振って知らないことを示した。すぐに私の不安の元に気付いて元氣付けるようにまたもや頭を撫でられる。子供じやないと反発する気力はなかった。甘えたくなっていた。両親からは放置されて育ったけれど、その代わり以上のものを明良ママと明良から受け取っている。私はとつても甘えん坊だ。人に頼るのが大好き。愛染女子学園の頃も小学生のときから仲の良かった3人の後ろにいて常に庇ってもらっていた。私はそういうポジションが心地よくて、「愛莉は〜」と困ったように眉を寄せて呆れながらも手助けしてくれる友人をいつも頼りにしていた。

もう守ってくれる人がいないという不安が急に膨らんできた。ここが公道だっことも忘れて明良に泣きつきたい気分ではいっばいだ。

信号は青になったのに私たちは止まったまま。何人か同じ制服の人が通り過ぎていく。中にはわざわざ振り返ってみていく人もいてそれでようやく正気に戻った。

「行くしかないね」

自分に言い聞かせるように呟くと明良がぺちんと私のおでこを軽く叩く。

「大丈夫。大丈夫」

小さい頃から何かあるとすぐに泣きべそになる私にいつも明良はそう言っただけで寝てくれる。その言葉を聞いているうちに少しだけ元気が出た。

3 学校到着

自転車はクラスごとに止めるようだけれどまだクラスも分からないので今回だけは適当に止めても良いようだ。明良の自転車と並んで止める。

促されて昇降口まで行くと在校生が待ち構えていてコサージユを胸につけてくれる。ピンクの花びらが可愛い。お礼を言って在校生から離れるともう明良の姿がなかった。きよるきよると見渡すと掲示板の前にいる。クラスの確認をしているらしい。慌てて追いかけた。

「明良」

袖を掴むと振り向いて苦笑する。

「タクミと愛莉は1組だ。俺は2組。やっぱりお前ら頭良いんだな」
「成績順なの？」

聞くと頷かれる。結構シビアな学校なのね。明良とクラスが離れてしまったことが残念で俯いた。

「アナウンスがあるまで教室で待機だから行こう」
クラスごとに靴箱があって自分の学籍番号が記されている所に靴をいれる。

2組の明良の靴箱は私の背後だ。

二人で顔を見合わせてから肩を並べて廊下を歩く。なんだか不思議な気分だ。同じ学校の制服を着て、同じ校舎にいるのなんて幼稚園以来だから。隣の明良をちらりと見る。見上げないといけなくなってしまう。顎のラインがすっきりしていて手でなぞりたくなる。肩幅も広がってがっちりしていて気付かないうちに男の子を卒業して男の人になってしまった。

この違和感も一緒に登校することを続ければ薄れていく。明良と

肩を並べて歩くのが普通になる。新鮮味がなくなるともいう。それはちよつと残念だ。このなんだかくすぐつたいような感情をずっと保っていたい。

「なんだよ」

じろじろ見ていたら明良がわざわざ顔をこちらに向けてくる。近すぎる距離に心臓が跳ねた。明良なのに。中学校に入学するまではほぼ毎日一緒にいて、長期休暇では寝食もともにした。今更取り繕おうとしても無駄なくらい明良は私の全てを知っている。そんな明良相手に何をどきまぎしているのか。もしかしたら高校入学のドキドキを頭の悪い脳が恋のドキドキと勘違いしているのだろうか。

「明良君、おはよう！」

背後からかけられた弾むような明るい声に明良の視線は私から逸れた。なんだろう。ちよつと寂しい。

明良は彼女に頷いて笑いかけた。

「また同じクラスだね。良かった」

彼女は私のことを無視して明良にしなだれかかるようにして歩く。はつきり言って感じ悪い。好きになれそうにないと直感が告げる。

「マユカ、従姉妹の愛莉。愛莉、マユカだ」

「はじめまして」

マユカちゃんは明良に振られて仕方なく挨拶してくれた。尖った唇が不本意だと言外に伝えている。私のことを見ようとししないで視線は床に釘付けた。一体なんでこんな失礼な子と交友があるんだろう。明良は常識のない子は嫌いじゃなかったっけ。

私の非難の眼差しに明良は苦笑した。

「明良君」

マユカちゃんも何か言いたいことがあるようで明良の右手の袖を引

っ張った。その甘えた仕草にもカチンとくる。だって昔から明良にそうやって甘えるのは私だけに許された権利なの。幼稚園の頃から同じ屋根の下で寝食を共にした私は明良に一番に優先される存在なの。私が明良の家に行ったら明良はお友達との約束だって断ってくれ。明日テストだったとしても私が行きたいといえば映画にだって一緒に行ってくれるの。

「マユカ、愛莉はタクミの彼女。それで愛莉、マユカと俺は付き合い合ってる」

マユカちゃんは自分が彼女として紹介されたことに満足して勝ち誇った視線を投げかけてくる。私はといえば明良に彼女がいたこと、その彼女の性格が悪いことに大変なダメージを受けて立ち直れないでいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2551ba/>

Just my type

2012年1月10日01時48分発行